

NEWSLETTER

～ 目次 ～

- ◆ アクティブラーニングニュースレター(p.1)
- ◆ アクティブラーニングとは？ (p.1)
- ◆ 授業とアクティブラーニングのリアル：教員対談（1）
 - ・ 授業づくりで大切なこと(p.1)
 - ・ 授業の構成をどのようにつくるか(p.2)
 - ・ フィードバックのコツ(p.3)
 - ・ 授業改善のタイミングと手立て(p.3)
- ◆ 今後の活動予定(p.4)
- ◆ 書籍『つくって学ぶアクティブラーニング』のお知らせ(p.4)

◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングは駒場アクティブラーニングスタジオ（KALS、東京大学駒場キャンパス 17号館 2階）といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングをとり入れる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。気になる記事がありましたら、東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 Educational Transformation(EX)部門（旧アクティブラーニング部門と初年次教育部門・自然科学教育高度化部門が統合する形で 2023 年 4 月に新設）までお問い合わせください。（若杉）

◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことで、

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中で読解・ライティング・討論など、学生が中心にな

って行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつかなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。（若杉）

◆ 授業とアクティブラーニングのリアル：教員対談（1）

2024 年度もそろそろ終わります。皆さんにとってこの 1 年間はどのような年度でしたか？授業を初めて担当された方、授業での学生の反応が例年と違うなあと感じた方、アクティブラーニング手法を取り入れてみて授業が活発になったと感じている方、あるいは、授業中の議論がうまく進まなかったなあと感じている方・・・などなど、授業だけを振り返ってみても、さまざまなことがあったのではないのでしょうか？

今回は、EX 部門でアクティブラーニングの普及促進を担当しているアクティブラーニングチームの教員二人（中村長史、中澤明子）による対談の様態をお届けします。授業づくりやアクティブラーニングについて感じていること、考えていることを率直に語りあいました。来年度以降の授業づくりや授業運営の参考になれば幸いです。

授業づくりで大切なこと

中澤：授業を設計する時や授業中の運営について、気を付けていることや心がけていることはありますか。

中村：これは中澤さんと一致すると思うのですが、やっぱり目的を明確にすることに尽きるかなと思っています。それは設計時もそうですし、教室でもそうです。常にそれが一番大事なのかなと思ってやってきました。例えば、初年次ゼミナール文科（以降、初ゼミ）の授業の場合、いい論文を書けるようになるという科目共通の目的があるのでいいわけです。けれども、他の授業、例えば全学自由研究ゼミナールだと、目的を教員がしっかりつくらなければ

なりません。初ゼミの場合であっても、論文を書けるようになるという科目共通の大きな目的はあるわけですが、そのもう一段下のところの目標は各教員に委ねられているので、やっぱりそこはしっかり考えようとはしてきましたね。

中澤：その目的や目標を立てる時に、心がけていることや、気を付けていることはありますか。

中村：どこまでできているかは分からないのですが、スモールステップを刻むことは意識しています。初ゼミの例をで続けると、今まで受験勉強に集中してきた学生がほとんどで、いきなり学術論文を書きましょうと言っても、そこには大きなギャップがあるので、どうすればよいか分からないわけです。ですから、まずは「良き読み手になる」ということを受講者には目指してもらっています。具体的には、論文の何が書いてあるのか要旨を正確につかんだり、その論文のいいところと、まだまだ改善できるぞという点をきちんと指摘できたりするようになるというところから始めています。毎週の輪読でそうしたトレーニングを繰り返して、ある程度できるようになったら、次に自分が「良き書き手になる」フェーズに入ります。そういった形でスモールステップを刻みながら徐々に進める意識はしてきたつもりです。

中澤：大きいゴールにどうやって到達するか、その道筋をしっかり考えて、それを各授業回にさらに落とし込んでいくという感じですかね。これは、意外と難しいのですよね。人によってはできない方もいらっしゃるかもしれないですけど、とても大事ですよ。

中村：大事ですね。僕もできているかどうか分からないので偉そうなことは言えないですけども、あまりうまくいっていないという方がいるとしたら、それはおそらく先生ご自身ができ過ぎるからではないかなと思います。われわれ（大学教員）は、専門家じゃないですか。だから、われわれが簡単にできることなので、他の人（学生）がなぜできないのかが分からないというのはあると思います。どのようにわれわれが今の状態に到達したのかを意識することが大切ですよ。われわれも最初からいきなり論文が書けたわけではないと思うので。そこをついつい忘れてしまうと、専門家の盲点のようになってしまふのかなと思います。そういう意味では、TA（ティーチング・アシスタント）さんが大事なんじゃないかなと思いますね。

中澤：院生なり学部生の立場から、授業を受けている学生はこういうことができない、難しいと思いますよと言ってくれるのがTAですよ。

授業の構成をどのようにつくるか

中澤：私の場合、知り合いの中学校の先生がやっていた方法を参考にしているのですが、授業のゴールに向かうために、学習者は何を知らねばならないかという知識と、例えば論文執筆を習得する授業なら文献検索などのスキルと、その両方に分けて

考えます。そして、この知識の部分は第3回の授業で扱おうかなとか、この部分はこの授業回でやろうかなと組み立てるのですけれども。中村さんはどうですか。スモールステップはどのようにつくっていますか。

中村：確かにそうですね。言われてみると、自分もそういうやり方をしていますね。逆算ですよ。ゴールに到達するためには何が必要なかを逆算して、それを13回の授業の中に配置していくイメージです。一回頑張ってもその仕組みをつくってしまえば、次年度以降も同じような形で進めることができます。うまくいかない年があったら、授業の順番を入れ替えてみるとか、そういうのはあり得ますけれども、それほど大きく変えずともうまく回っていくと思います。初めて授業を担当する時は大変かもしれないですけど、ゴールから逆算して配置することは、先生自身の負担を減らす意味でも大事ではないかなと思いますね。

中澤：あと、初めて担当する授業だと、どうしても扱う内容が多くなり過ぎるじゃないですか。そういう時は、ゴールに向かって、これが必要、必要、必要・・・と書き出して、そこからいかに削るかが大切かなと思います。あるいは、最初の年は全部扱ってあふれちゃって、次の年はどこを削るかという、そういう考え方もできるかなと思います。

中村：おっしゃるとおりです。それは、研究者として論文を書くのと一緒だと思っています。2万字で論文を書けと言われても、最初はついついあれこれ書いてしまって字数オーバーとなって、そこから本当に大事なところだけを残すべく分量を削っていくわけですけど、授業も同じように行えるといいのかなと思います。さらに言うと、僕はよく、研究仲間にドラフトの段階で論文を読んでもらって、ここは分かりにくいと言われて直したりするんですけど、授業も本当は、ピアレビューのように教員同士で気軽に相談できると、なおいいのだらうかなと思います。

中澤：そうですね。私の場合、ピアレビューの代わりに学生からの評価をもらうようにしています。中村さんはどうですか。TAさんの意見を聞くなど、ピアレビューにあたるような取り組みや場はありますか？

中村：そうですね。TAさんの意見と、何よりも受講生の反応ですよ。反応は、アンケートとして学期末に出てくるものももちろんそうなのですが、日頃の授業でも、見ているとある程度は分かるじゃないですか。もちろんある程度の負荷は必要だとは思いますが、あまりに多過ぎるとかえってモチベーションをそいでしまったりするので、調整することはやっています。例えば、初ゼミはかれこれ5年間やってきましたが、2020年に初めて担当した時と今とはだいぶ変わりましたね。

中澤：学生の反応について、どのような反応だとやばいなと判断しますか？

中村：典型的には、提出物のクオリティーですね。そもそも提出できない学生が複数出てきたら赤信号だと思いますし、提出はしていても、明らかに内容を理解し切れてないものだったらまずいですよね。そのままいってしまうと、きちんと構成をしている授業の場合には特に駄目ですよ。その後積み上がっていかないことになるので。学生からすると、毎週課題を出しやがってとと思っているかもしれないですけど、やっぱりこまめにチェックするのが大事なんじゃないかなと思いますけどね。

中澤：そうですね。学生は「課題がたくさん出されて大変だ」と思うかもしれないけれども、正直教員も大変なんですよ。

中村：そうですね。教員も提出物を確認しますし。

中澤：受講生が20人なら20人から課題が提出されるので、それにフィードバックするのは教員も大変ですよ。

フィードバックのコツ

中澤：フィードバックする時のコツや心がけていることはありますか？

中村：そうですね。全然具体的な改善ができていなかった点だなという反省のほうが大きいですけれども、毎年担当していると良いこともあります。例年同じところでつまずいたりということがあるので、そういう点はあらかじめ予測もついてきますよね。1年目は、全員にコメントしていたのが、だんだん典型的なコメントとしてできあがるので、3年目ぐらいからはそれを使ってフィードバックすればよいので、教員側の効率化も図れるかと思えます。

中澤：私は、成果物を見て、大体同じところでつまずくことに気づいたら、次の年はそれを授業で扱います。

中村：そうです。それも大事ですね。

中澤：結局、学生の課題をフィードバックすると、授業改善がセットになっているのかなと思います。

中村：そうですね。本当におっしゃるとおりですね。

授業改善のタイミングと手立て

中澤：「授業改善」と言っても本当に「改善」になっているかどうかはわかりにくいところはありますけれども、授業を変えてみようと思うきっかけや手掛かり、あるいは、気を付けている点はあるですか。

中村：初ゼミの例を続けると、5年間で一番変えたのは、課題文献の数と内容です。数というのはどういうことかということ、初年度は立て続けに6本ぐらい課題文献を読んで要旨、意義、問題提起の「3点セット」を毎週提出してもらっていたんですけど、それがやっぱりしんどいという学生がいました。もちろ

んでくる学生もいるんですけど、その段階でちょっと疲れちゃう学生もいるんだなということが分かってきたので、だんだん数を絞って行って、最少の数で、しかし学んでほしいことは学べるように工夫しました。今は基本的に3本の課題文献しか扱っていないので、半減したってことですね。

あとは内容で、それは数を減らしたことによっておのずと内容が変わる面もあるんですけども、それ以上に学生の反応、あるいはTAさんからのアドバイスもあって、それこそ専門家の盲点で、これぐらいは東大生だったら分かるんじゃないのって思っていたのが、高度過ぎる内容で、「ちょっとジャンプすれば届く」距離ではない、「肉離れしてしまう」ことになっているということに気付いたので、読みやすいものに替えるとか、そういうことはずっと試行錯誤してきましたね。

中澤：私の初ゼミも課題が多いと言われます。課題が多くても取り組んでもらうための工夫や心がけていることはありますか？

中村：一番意識しているのは、フィードバックは必ずするということです。学生からしたら、課題が大変だとは思いますが、それで結局自分のパフォーマンスってどうだったんだろうってのが分からないままというのは、モチベーションが下がりやすいかなと思うんですよ。

あえてもやもやした状態に置いておくことが必要な場面も教育にはあると思うんですけど、基本的にはやっぱり、特に初学者の場合には教えてあげたほうが良いと思います。教員のほうも大変ですけど、毎週フィードバックをすることで、多少なりともモチベーションを維持したいと思っています。

また、いい成果物を授業中に取り上げています。ただ、最近そこでちょっと難しいなと思うのが、人前であまり褒められたくない学生がいることです。僕なんかは能天気なので、みんなの前で褒められたらめっちゃうれしくて、もっと頑張ろうって思うんですけど、そうじゃない学生もいるってことに気付きました。ただ、いいものはやっぱり全体で共有したほうが良いので、匿名で紹介してもいいですかって了解を取った上で紹介していますね。

中澤：なるほど。今のは初ゼミの話だと思いますが、全学自由研究ゼミナール（以降、全ゼミ）や高度教養特殊演習の授業はどうですか。

中村：全ゼミは、あまたある全ゼミの中から選んでくるわけじゃないですか。なので、総じてモチベーションがそもそも高いですよ。だから、もちろん意欲を喚起するっていうのは、大事なんですけども、比較的やりやすいかなと思います。

その中でも模擬国連（全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成I」、「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成II」）について説明しますね。僕の模擬国連のゼミでは、毎週、模擬国連会議をやっています。会議が始まったら、もう放っておいても学生は生き生きとやるんです。やはりゲーム性があって楽しいので。だか

ら、教員の腕の見せどころは会議の前だと思っています。事前学習の段階でお手伝いをしてあげられないと、楽しめるはずの会議も楽しめなくて、ひいては学期中ゼミ全体がつまらないってことになりかねません。その入口のところと、あとそれから出口です。会議が終わった後もやりっ放しにするんじゃないで、専門家としてフィードバックをする振り返りの時間をきちんと設けて、モチベーションを保てるようにしたいなと思っていました。

あともう一つは、模擬国連に限らないんですけど、全ゼミを高度教養特殊演習と合併してやってるじゃないですか、二枚看板で。それで特に気を付けたほうがいいと思うのは、1年生から4年生まで、文系理系、いろんな人がいる以上、既有知識の差が非常に大きいということです。一番既有知識がない人がちんぷんかんぷんでつまらないということにならないように、しかし、一番既有知識がある人が、そんなことは全部知ってるからつまらないともならないように、うまくマネージするのが大事なのかなと思いました。

中澤：なるほど。私の全ゼミの場合、そもそもオープンエデュケーションという言葉が学生は知らなかったり、「学習観」についてもいくつも知らなかったりするので、あまり既有知識が問題になると感じたことはないです。文系理系、学年の差がキーになっているとあまり感じたことは実はなくて。議論してもらおうと、教育学部に進みたい学生は他の学生よりも知識があるように感じます。けれども、学生の感想を見ると、自分より詳しい人と議論ができて良かったというポジティブな意見もあるのです。これは、分野やトピックの違いもあるかもしれないですね。

中村：そうですね。分野の違いはあると思います。ただ、今おっしゃった、知識のある人と議論できて良かったというのは、僕のゼミでもよく見られる感想です。それを可能にしていることの一つは、成績評価だと思っています。つまり1点刻みに相対評価で付けるのではなくて、全ゼミの場合は普通に授業に取り組んでいれば合格するわけですよ。合否だけで付けていることで、学び合いがしやすい土壤があるかなと思っています。本来は、1点刻みで成績をつける授業でも、結果は結果として優劣はもちろんつくんですけども、その過程では学び合いが起きるように持っていけるといいんじゃないでしょうか。

「授業とアクティブラーニングのリアル：教員対談（1）」と題して、対談の様様をお伝えしてきました。いかがでしたでしょうか。紙幅の都合ですべての内容を掲載することができませんでした。続きは、2025年度に発行するAL NEWSLETTERで紹介したいと思います。（中澤）

◆ 今後の活動予定

2025年度Sセメスターも授業を開講し、引き続きアクティブラーニング型授業モデルの検討・開発を行います。また2025年夏頃にワークショップを開催する予定です。部門の活動に関する情報は、部門ウェブサイト (<https://komex-ex.c.u-tokyo.ac.jp/ja/>) で発信していきますので、ぜひご覧いただければと思います。ワークショップへの参加もお待ちしております。

◆ 書籍『つくって学ぶアクティブラーニング』のお知らせ

授業の開講を通して行なっているアクティブラーニング型授業のモデル開発のうち、「つくって学ぶ授業」に関する書籍が2025年2月に刊行されました。（本ニュースレターVol.10, No.2でも詳細をお伝えしております。）

書籍では、「つくって学ぶ授業」として、学生が教材をつくる事例、授業をつくる事例、ワークショップをつくる事例を知ることができます。また、いわゆるアクティブラーニング型授業を進める際の試行錯誤についてもお伝えしています。「つくって学ぶ授業」に関心がある方だけでなく、広く多くの方に参考となる書籍になればと考えています。ぜひお手にとってみてください。

（奥付）

- 発行年月日：2025年3月6日
- 発行：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構 EX 部門
若杉桂輔・中澤明子・中村長史
- 連絡先：dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp
- Web サイト：https://komex-ex.c.u-tokyo.ac.jp/ja/